

2023年『沙石集』現代語訳

次の文章は『沙石集』の「沙石集」の一文「耳売りたる事」である。

これを読んで、後の設問に答えよ。



南都に、ある寺の僧、耳のびく厚きを、ある貧ひん

奈良に(おいて)、ある寺の僧が、

耳たぶが厚いのに対して、

(別の)ある貧しい

なる僧ありて、「アたべ。御坊の耳買はん」と云ふ。

僧がいて、

「ください。

貴坊の耳(たぶ)を買おう」と云ひ。

「よく買ひ給へ」と云ふ。「いかほどに買ひ給は

(耳たぶが厚い僧が)

「すぐに買ってください」と云ひ。

(やうに)

「どのくらい(の価格)で買いなさい

ん」と云ふ。「五百文に買はん」と云ふ。「やら

ますか」と云ひ。

(耳たぶを買いたがっている僧が)

「五百文で買しましょう」と云ひ。

(耳たぶが厚い僧

ば)とて、銭を取りて売りし。

が(「それならば)

(良いだろう)

「と云ひて、

金銭を受け取って売ってしまった。

その後、京へ上りて、相者のもとに、耳売りたる僧

その後、

京都へ行って、

人相見のところに、

耳を売った僧と一緒に

と同じく行く。相して云はく、「福分おはします

(耳を買った僧が)

行く。人相見が(耳を買った僧の)

人相を占って、

「幸運(な人相)はございません」

ず」と云ふ時に、耳買ひたる僧の云はく、「あの御

と云ひしと、

耳を買った僧が、

「あの(福耳の)御坊

坊の耳、その代銭かくのどとき数にて買ひ候ふ」と

の耳を、

代金いくらいくら買いました」と云ひ。

云ふ。「さては御耳にして、明年の春のころより、

「それならば、御耳のおかげで、

来年の春のころから、

御福分かなひて、御心安からん」と相す。

幸運に恵まれて、

御心穏やかでいられるでしよう」と云ひ。

さて、耳売りたる僧をば、「イヤばかりこそ福相おは
ところが、耳を売った僧（の人相）については、
「耳だけは幸運な相がありだけでも、

ほか

すれ、その外は見えず」と云ふ。かの僧、当時まで

その他は（吉相は）見当たらない」と言う。

その（耳を売った）僧は、今現在まで、

せけんふかい

ひごくう

世間不階の人なり。「かく耳売る事もあれば、貧窮
暮らしかきがよくない人である。「このように耳を売ることもあるのだから、
貧乏を

を売ることもありぬべし」と思ひ、南都を立ち出で

売る（＝手放す）こともきつとめるだろひ」と思ひ、

奈良を立ち去って、

て、東の方に住み侍りけるが、学生にて、説法

東国に住んでおりましたが、

学識を持った僧で、

説法

などもする僧なり。

などもする僧である。

ある上人の云はく、「老僧を仏事に請ずる事

ある高僧が（この耳を売った僧に）言うには

「老いた私を 仏事に

招待している用事が

あり。身老いて道遠し。ウ予に代はりて、赴き給へ

ある。（私は）年老いているし、道のりが遠い。

私に代わって、

出向いてください

かし。ただし三日路なり。想像するに、施物十五貫

よ。ただし、三日かかる道のりだ。

予想では、

布施は十五貫を

文には過ぐべからず。またこれより一日路なる所

もん 文には過ぐべからず。

また（別件で）ここから

一日の道のりの場所に、

に、ある神主の有徳なるが、七日逆修をする事

ある金持ちの神主が、

七日間にわたって逆修（＝生前に死後の冥福を

あり。これも予を招請すといへども行かんことを

祈る仏事）をする仕事がある。これも私を招待すると言っているけれども、行こうという気にならない。

欲せず。これは、一日に無下ならば五貫、よしせば

こちびは、

一日あたり以最悪五貫、

し井くすゑて

十貫づつはせんずらん。公こう、いづれに行き給はん」と
十貫じゅうくわんづつはくれるだらう。

云ふ。かの僧おほ、「仰すまでもなし。遠路しんろを凌ぎて、
聞く。その(耳を売った)僧は「お聞きになるまでもない。遠路を耐え忍んで、

十五貫文など取り候はんより、一日路行きて七十貫
十五貫文ほどを 取得するようなのより、 一日の道を行って 七十貫を

こそ取り候はめ」と云ふ。「しからば」とて、一所
取得しましょう (高僧は)「それならば」と言つて、 もう一か所
べつこん

へは別人をして行かしま。神主のもとへはこの僧
へは他の僧に行かせる。 神主の所へは、この僧が

行きけり。
行つた。

既に海を渡りて、その処ところに至りぬ。神主は齡よほひ
既に海を渡つて、 その(神主の)場所に到着した。 神主は年齢が

八旬はちじゆんに及びて、病床に臥したり。子息申しけるは、
はちじゆん 病で臥せている。 (その神主の)息子が申し上げたことには、
八十歳に達して、

「老体の上、不例日久しくして、安泰頼み難く候へ
ふれい (父は)老体に加えて、病気である月日が長くて、 回復は期待し難いです

ども、もしやと、先づ祈禱ま きたうに、真読の大般若あり
けれども、ひよつとすると (回復するのでは)と(期待して)、 まずは祈禱として『大般若経』の真読(=

たく候ふ」と申す。「また、逆修は、いかさま用意
省略せずに読誦すること)をお願いします」と言つ。また、逆修はぜひとも(私たちの方で)準備いたし
つかまつ

仕り候ひて、やがてひきつぎ仕り候はん」と云
まして、 そのまま(祈禱に) 続いて、 致します」と言つ。

ふ。この僧思ふやう、「先づ、大般若の布施取る
ふせ この僧が思つことには 「まず、大般若経の(分の)布施をもらおう。

べし。また逆修の布施は置き物」と思ひて、安きこ
また、逆修の布施は手に入ったも同然だ
と思つて、「お安い御用で

とにて候ふ。参るほどにては、仰せに従ふべし。
参上したからには、
仰る通りにします。（大般若経の真読も

工何れも得たる事なり。殊に祈禱は吾が宗の秘法な
逆修もどちらも（私の）得意なことです。
特に祈禱は私の宗派の秘宝である。

り。必ず靈驗あるべし」と云ふ。
必ず靈驗があるでしょう」と言ひ。

「さて、酒はきこしめすや」と申す。大方はよき
「よいほど、（お坊様は）お酒は召しあがりますか」と聞く。
およそ酒好きではある

上声にてはあれども、「酒を愛すと云ふは、信仰
けれども、
「酒が好きだと言つて」、
信仰心が

薄からん」と思ひて、「いかにも貴げなる体なら
薄いだらう」と思つて、「いかにも尊そつな僧の風格でいよう」
たつと
てい

ん」と思ひて、「オ一滴も飲まず」と云ふ。「しから
と思つて、「一滴も飲まない」と答える。
「それならば」

ば」とて、温かなる餅を勧めけり。よりて、大般若
と言つて、（神主の家族は）温かな餅を勧めた。
そこで、（僧は）大般若経の啓白

経の啓白して、かの餅を食はしめて、「これは
（＝趣旨や願意を仏に申し上げること）をして、その餅を（神主に）食べさせて、「これは
ほふみ
ぶざうごう

大般若の法味、不死の薬にて候ふ」とて、病者に
大般若経の法味、
不死の薬でございます」
と言つて、
病人に

与へけり。病者貴く思ひて、臥しながら合掌して、
与えた。
病人は尊く思つて、
横たわったまま
合掌して、
さんぼうしよてん
がつしやう

三宝諸天の御恵みと信じて、一口に食ひけるほど
三宝諸天の御恵みだと信じて、
一口食べたところまで、

に、日ごろ不食の故、疲れたる気にて、食ひ損じ
ここ数日間、何も食べていなかったので、噛み疲れた様子で、うまく食べられず、

て、むせけり。女房、子供、抱くて、とかくしけれ
むせた。女房と子供が（神主を）抱きかかえて、あれこれした

ども、かなはずして、息絶えにければ、カ中々とかく
けれど、思い通りにならず、死んでしまったので、かえってあれこれと

申すばかりなくして、「孝養の時こそ、案内を申さ
申すこともなく、けつやう「亡き親の追善供養の時に、」連絡を申し上げましょ

め」とて返しけり。
う」と言つて、（僧を）帰した。

帰る路にて、風波荒くして、浪を凌ぎ、やうやう
みち（僧は）帰る道では、波風が荒く、波を乗り越えて、なんとか

命助かり、衣裳以下損失す。また今一所の経営は、
命からがらで、いしやういげ（耳を売った僧が選ばなかった）もう一か所

布施、巨多なりける。これも、耳の福売りたる効か
こた（法事では、布施を莫大だった。これも、福耳の幸運を売ってしまったせい）

と覚えたり。万事齟齬する上、キ心も卑しくなりに
そご（全てにおいて意図したとおりにならない（で不運な）上に、心も卑劣になつて

けり。
しまった。